

『The Grammar of Happiness』

Essential Media & Entertainment

パトリック・ハインリッヒ

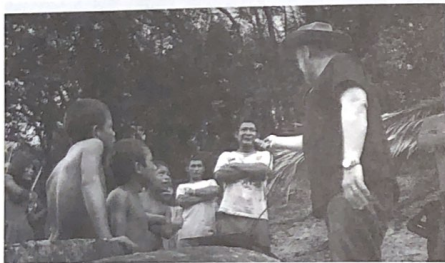
[Patrick HEINRICH]

言語は文化的な構築物に過ぎないのか

ドキュメンタリー『The Grammar of Happiness (幸福の文法)』は、一般向けであるにもかかわらず、言語学で扱われるような文化と言語構造の関係といったトピックも取り扱う。言語の形成において文化が重要であることは、おそらくすべての社会言語学者が同意するであろう。その影響は、例えば異文化コミュニケーションにおける問題、標準語と地域変種(方言)における構造的な差異、近代化された、あるいは非近代的な言語の差異などにおいて最終的に顕在化する。しかし、このドキュメンタリーで提起されるのは、これより根本的なテーマ、「言語は文化的な構築物に過ぎないのか」、という問いである。いうまでもなく、このような言語観は普遍文法の原理に反する。普遍文法の仮説によれば、言語開発能力は人間のDNAに依拠し、抽象的な言語構造において世界中のすべての言語には共通する普遍的な構造があるとされる。普遍文法の学派は、もちろんまずノーム・チョムスキーの研究と関係する。対して、ある言語は単にある文化の産物であるという考え方は、近年ではとくにダニエル・エヴェレット(Daniel Everett)とアマゾン川流域で話されるピダハン語(Pirahã)を連想させる。この『The Grammar of Happiness』は、ダニエル・エヴェレットと彼が行ったピダハン語研究に関する映画である。もっと具体的にいえば、エヴェレットによる普遍文法への批判とそれに対する普遍文法を擁護する人々の反駁が映画の中心であると言ってもよい。

ストーリー

人間と言語の関係性を検討するまえに、まず映画の基本的な情報を紹介した



<http://www.smithsonianchannel.com/videos/grammar-of-happiness-sneak-peek/16905>

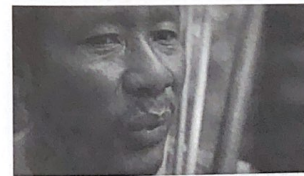
い。「The Grammar of Happiness」は、マイケル・オニール (Michael O'Neill) とランドル・ウッド (Randall Wood) が監督、オニールが脚本をつとめ、オーストラリアのエッセンシャル・メディア&エンターテインメント (Essential Media & Entertainment) からリリースされた52分の短編ドキュメンタリーである。2012年にオーストラリアの公共放送ABCで放送されたあと、世界のさまざまなテレビ局で放送され、多数の賞を受賞した。主なものとして、チェコのアロモウツ市での「学生審査員賞 (Student Jury Award)」や、フランスのピアリッツ市の「若手ヨーロッパ審査員賞 (Young European Jury Award)」、米国デンバー市の「ジャクソンホール・サイエンスメディア賞 (Jackson Hole Science Media Award)」などが挙げられる。

間違いなくストーリーはうまく構成されており、非常に興味深いものである。プロットの大筋は次のように展開される。1970年代、麻薬常用者の若いミュージシャン (ダニエル・エヴェレット) が、キリスト教を布教するために宣教師となつて、ブラジルのアマゾンに住むある部族 (ピダハン) と一緒に生活をはじめた。そして、布教のためにピダハン語を勉強し、聖書を翻訳する。しかし、ただ一人さえも改宗させることができず、布教に失敗してしまふ。そんな中、布教活動は「心の植民地化」であるという思いがしだいに芽生えはじめ、自身のキリスト教信仰を失い、厳格なキリスト教信者である家族にも見放されてしまふ。最終的に、エヴェレットは言語学にのみ焦点を当て、その世界で注目を集めることとなる論文を発表する。

ドキュメンタリーの制作クルーは、エヴェレット本人とピダハン部族300人に取材している。それによって、視聴者はこの部族の言語、社会と文化について知ることができる。ピダハンは狩猟採集民族であり、1940年代からあらゆる文化的、言語的、宗教的な同化圧力に抵抗してきた。300年以上、ブラジル・ポルトガル語話者と接触してきたにもかかわらず、かたくなにモノリンガルをとおしてきた。そのため、ピダハン語は他の言語の影響を受けなかった。ピダハン語は、古代ムラ (Mura) 語族の中で現存する最後の言語であり、音調が3、音素は11しかなく、形態論的には膠着語に分類される。この簡単な音声体系のおかげで、ピダハン語は、たとえ口笛であっても意味を伝えることができる。さらに、ピダハン語は色に関する語彙が欠いており、数字も持っておらず、未来形や過去形もない。これまでに記録された言語の中で、最も簡単な親族体系を備えている。しかし他方でピダハン語話者は、自分達の土地に棲息する動植物の生態について詳細な知識を持っており、全ての動植物の名前と用途を知っている。

言語学的なセンセーション

このような社会言語学的状況は、近代化していない社会においては珍しくない。マティアス・ブレンツィンガー (Brenzinger 2006) のような小言語の専門家は、言語が使用される状況やコンテキストによる言語機能範囲が大言語とは異なると指摘している。またM.A.K.ハリデー (Halliday 2003) といった機能言語学者は、文法はひとえに話者の文化的な体験の結果であると主張した。そのため、小言語を研究する社会言語学者にとっては、ピダハン語のような言語生態 (language ecology) は珍しいものではないと思われるかもしれない。しかし、エヴェレットは2005年の論文において、ピダハン語はリカージョン (再帰性) を欠いていると主張した。いうまでもなく、リカージョンは発話を無限に拡張するための最



<http://www.smithsonianchannel.com/videos/grammar-of-happiness-sneak-peek/16905>

も基本的かつ一般的な統語構造である。とくに生成文法の学者は、リカージョンが人間の脳構造の窓であると考えている。したがって、ピダハン語のリカージョンの欠如は、確かに言語学的なセンセーションであるといえる。ピダハン語による発言は原理的に完結したものとなる。

例えば、接続詞、あるいは間接語法「…とAさんが言っている」などの文法的な手段によって発話を拡張していくことができない言語なのである。このようなリカーションが可能となる構文上の要素が存在しないことによって、ピダハン語には複合的な統語構造が存在しない。そのため、リカーションが必要とする制限のない数字というものはピダハン語にはない。

ピダハン語に関する論文によって、エヴェレットは有名な学者となり、2005年以降ポピュラーな本も出版している。これらの本のうちの一つは日本語にも翻訳された(エヴェレット2012)。しかし、このような新たな注目を集めたがゆえに、エヴェレットは厳しい批判的にもなった。映像の中で、チョムスキーはエヴェレットのことを学問的な「charlatan (バテン師)」であると述べ、また他の学者もエヴェレットの研究は人種差別的であると批判している。このような批判もあるが、マサチューセッツ工科大学(MIT)が行ったフォローアップ研究ではエヴェレットの調査結果が確認され、MIT研究者もピダハン語にはリカーションがないと推測している。だが、生成文法学者は、リカーションが普遍的な言語機能であるという主張から、MITによる調査にも疑いのまなざしを向ける。こうして、ピダハン語と言語の本質を巡る議論は現在まで続いており、その結果として、エヴェレットの研究は世界中の新聞に掲載され、「言語学界のスーパースター」になってしまったと言えるかもしれない。

我々はサビア・ウォーフ仮説を再考する必要があるか

『The Grammar of Happiness』によって、エヴェレット自身と彼が研究した言語、アマゾンにおける部族生活の詳細を学ぶことができるが、他方ではこのドキュメンタリーは社会言語学の授業におけるディスカッションにも役立つのではないと思う。もちろん社会言語学者にとっては、リカーションと構文よりも、言語相対性(linguistic relativity)が重要なテーマとなるだろう。いうまでもないと思うが、言語相対論あるいは「サビア・ウォーフ仮説」とは、ある言語構造は世界の概念化に影響を与えるとする言語観のことである。言語相対性理論のいわゆる「強い仮説(strong version)」と呼ばれる見解においては、言語構造が考え方を画定すると主張される。したがって、言語の仕組みは認知のカテゴリーを決定する。これに対して、言語相対性理論のいわゆる「弱い仮説(weak version)」においては、言語の仕組みは認知のカテゴリーに影響を与えるのみ主張される。現状では、多数の言語学者は「弱い仮説」に同意するかもしれない。言語構造による概念、思想と行動の多様性は、実際に資源であり、文化資産であ

るともいえるだろう。このような概念的な多様性のおかげで、諸言語がその言語話者の幸福と福祉に寄与するとフィッシュマン(Fishman 1982)は述べている。エヴェレット自身は、言語相対性理論について、かなり「強い」意見を表し、番組のタイトル『幸福の文法』は実際の彼の発言からつけられている。エヴェレットによれば、ピダハン語には過去型や未来形、数字が存在しないため、話者の意識は現在にのみ向いて、つまり「所有する」という欲望を重視していないという。そして、直接的な経験にのみ焦点をあてる思考が、ピダハン部族の生活だけでなく、かれらの言語構造にも影響を与えていると考える。言い換えれば、言語と文化はエヴェレットにとって同一の現象なのである。だからこそ、同化を拒んできたピダハン部族は、かれらの言語文法による幸福な生活を送ることができるとエヴェレットは結論づけている。

もちろん映像の中では、ここで議論してきたよりも多くのエピソードが紹介されている。特にラスト部分では、ピダハンのコミュニティ生活の運命を左右する劇的な出来事が起こる。何か起こったのか興味があれば、すぐにこのドキュメンタリーを見たほうが良いだろう。

参考文献

- Brenzinger, Matthias (2006) "Conceptual Loss in Space and Time: Vanishing Concepts in Khwe, a Hunter-Gatherers' Language" 『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』116、71-73頁。
- Everett, Daniel L. (2005) "Cultural Constraints on Grammar and Cognition in Pirahã", *Current Anthropology* 46 (4), pp.621-646.
- エヴェレット、ダニエル・L. (2012) 『ピダハン——「言語本能」を超える文化と世界観』、屋代通子訳、東京：みすず書房。
- Fishman, Joshua A. (1982) "Whorfianism of the Third Kind: Ethnolinguistic Diversity as a Worldwide Societal Asset", *Language in Society* 11 (1), pp.1-14.
- Halliday, M.A.K. (2003) "New Ways of Meaning: The Challenge to Applied Linguistics", A. Fill and P. Mühlhäusler (eds.) *The Ecological Reader*, London: Continuum, pp.175-202.
- エッセンシャル・メディア&エンターテインメントHP 『The Grammar of Happiness』: <http://www.essential-media.com/node/119#synopsis>